

34 みつけちゃんとの出会いーわくわくどきどき生活科ー

奈良県教育委員会の教育放送課長を務めていた中野博先生から、「先生、小学校生活科の番組を作りたいと考えているのですが、どう思いますか」

と尋ねられたのは、平成2年のことであった。

当時、「小学校指導計画の手引」の作成にかかわり、「具体的な活動や体験を通して…」で始まる生活科の学習の指針について論議し、生活科学習指導のポイントの第1番目に「直接体験を重視すること」をあげていた私は、少し考え込んだ。安易にテレビを視聴することによって、「テレビで見たからいいでしょ」と終わってしまうことを恐れたのである。

しかし、子どもが活動を始めるには何かのきっかけがある筈である。それは、学校の行き帰りに見聞きしたことや、おじいちゃんに聞いた話であるかも知れない。また、教科書の挿絵かも知れないし、友達といっしょの遊びであるかも知れない。ならば、教育的意図のもとに編集された番組であれば、いっそう生き生きとした活動を誘発できるのではないか。そんな思いがあって、平成3年度から奈良県教育放送の生活科教育番組の作成にかかわることになった。

教育放送小学校生活科番組専門委員を委嘱されて集まってきた教員は、すべて生活科への移行の当初から実践的な研究を進めてきた者であった。そして、これに学校教育課、教育センターと教育放送課の担当者が加わった。

第1回のこの会議では、生活科の学習の根幹にかかわることがらやそれに対するテレビのかかわりの問題が論議された。また、番組づくりの実際の課題として、児童が主体者となるこの教科で、シナリオをどう作成し、どのように撮影し編集するかが問題となった。

通常の番組作成では、その番組のねらいなどを確定し、ストーリーを考え、シナリオを書いて、それに基づいた映像を撮り、編集して1本のものにまとめていく。その間には、教育行政をになうものとして上司の決裁が必要であり、それに対する予算が執行される。

それに対して、生活科の学習では、『何を教えるのか』という教師主導の発想で授業を組み立てるのではなく、『何を育てるのか』というように児童の自発性に視点を置いて組み立てる（指導計画の手引より抜粋）のであるから、流れの中心は子どもたちの活動であり、行政の手法としての流れには沿いかねるところが多いのである。

幸い、こうした論議の中、生活科の本質についての理解が得られたことや担当者の努力が実って、番組づくりはスムーズに進んだ。そして誕生したのが、1年生番組「みっけちゃんといっしょ」と2年生番組「わくわくどきどきせいかつか」の2つのシリーズであった。

1年生シリーズの最初の番組は「みずとあそぼう」であった。冒頭の、もくもくと盛り上がる入道雲、太陽とセミの声、川に飛び込む子どもたちの姿に象徴される暑い夏の日様子は、今もなお目に残っている。こうした映像に続いて、雨の運動場でどろんこになって遊ぶ姿、いろいろな材料で作った大きな舟をプールに浮かべ、それに乗って遊ぶ子ども、と次々に展開される活動は、子どもたちの積極的な活動を誘発したことは容易に想像がつく。

2年生シリーズの第1作は「町のたんけん」であった。この番組では、城島小学校の御簾圭子先生の学級の子どもたちが主演として登場した。探検に出かける準備としての危険箇所の確認、グループのワッペンづくり、「ただいま探検中」の旗や名刺づくりの様子が紹介された。そして、町中での活動、これらも、県内250の小学校の子どもたちに「やってみよう」という気持ちを起こさせたに違いない。

こうして始まった生活科の教育放送は、奈良県内の小学校を舞台にした特色ある活動が映像化され、子どもたちの生き生きとした活動を呼び起こすものとなっていったのである。

平成5年、私の勤務する生駒小学校も「野菜を育てよう」の番組作成の場となった。種まきに始まり、水や肥料をやり草とりをし、子どもたちが心待ちにしていた収穫までの息の長い取り組みは、構成・演出を担当されたパンクリエイトの河合岑一郎さんや撮影スタッフによって収録され、奈良テレビから放映された。この番組の主演は1年生の子どもたちであり、彼らを支えていたのが校舎南側の学級園に育つトマトやレタス、キュウリと担任の谷山和子先生であった。

「うんと大きく育てる。おいしい野菜を育てて、みんなと食べる」そんな気持ちに満ちているこの番組は、翌年11月15日に生駒小学校を会場に開催された奈良県の生活科研究大会で紹介された。

この大会では、平成元年度に始まった生駒市の生活科研究のあゆみにも報告されている。「学校における教育研究は、児童の生の活動を通して行うべきものである」という考え方に基づいて、私は当時勤務していた生駒台小学校の井上廣先生に「わたしのかぞく」の学習を公開してもらった。それは、学校教育法施行規則が改正され、新しい学習指導要領が告示されたもののまだ施行されていない平成元年度のことであった。以後、生駒市では毎年、会場を変えて生活科の実践的な研究を進めてきた。こうした初期の実践には、「私が生活科をつくるんだ」という意欲があふれていた。

そして、生活科の教育内容の創造のために、各小学校区に設置されている幼稚園等との交流が始まった。それは、小学校の教員が「みつけちゃん」となって幼稚園・保育園に学び、交流し、よりよい教育を創造しようとする第1歩であった。